
がらくたくえすと

てる。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がらくたくえすと

【Nコード】

N8687Y

【作者名】

てる。

【あらすじ】

青年マテウスは名家の次男坊。いたずらが過ぎて倉庫に閉じ込められたマテウスは、見るも見事な剣を手にする。だがそれは、抜き放たれることのない”がらくた”のはずだった。そしてそれは、世界を救いも、滅ぼしもする至宝だった。序章「旅立ち」編終了、第2章「醜い泥沼」編に入ります。

1・宝探しタイム(前書き)

初投稿作品です。

完全不定期の更新となる予定ですが、完結までがんばります！

なお、本作品は筆者が「昔作ろうとして挫折したRPGのシナリオ」を基にしていますので、ゲームのノベライズ作品風に仕上がればいいなあ、などと思ってたりします。

では、本編どうぞ。

1・宝探しタイム

序章→旅立ち→

side ????

「そこで反省している!」

尻餅をつく形になった俺の目の前で、頑丈な扉が閉じられる。直後に聞こえたがちゃり、という音はきつと鍵が閉められた音だろう。つまり俺は、閉じ込められたわけだ。

わけだ。じゃねえ!

いったい!どうして!こうなった!

→回想→

うちのメイドー(以下メ)「きゃああああ!」

親父ー(以下父)「どうした!」

メ「旦那様!厨房に怪しい影が!」

父「何だと?よし、わしが行こう!」

父「何者じゃ!」

俺「ふへ?(がぶがぶ)」

父「……………」

俺「……………。(もぐもぐ)」

父「お〜ま〜え〜と〜い〜う〜や〜っ〜わ〜!」

俺「あ、あの、親父?(ごっくん)」

父「何をしとるかー!」

〜回想終了〜

うん、原因判明。しつまい

いや、ね？ほら、年頃の男子ってのは他人より腹が減る生き物な
のですよ？それがあんな程度の昼飯で足りるわけが・・・ねえ？

「しっかしあれだね。つまみ食い程度で物置送りとは・・・親父も
古いね。」

誰に、というわけではないがごちてみる。

べつに俺には電波受信機能なんてついてないぞ？・・・たぶん。

「その分だと反省してなさそうだな、マテウス。」

な？！何処から声が！！

べ、別に俺は怪電波なんて受信できないぞ？それとも、まさか・・・
？くそう、俺は電波じゃない俺は電波じゃない俺は電波じゃない
俺は・・・あだっ！

はい、頭に何か当たりました。いえ、当てられました。石を。

「こつちだこつち！何を幽霊としゃべつとる！」

ふと俺が斜め上を向くと、そこには見慣れた顔が。天窓・・・つ
て程も高くはないが、一応ここには窓があるのだ。ちなみに、何で
か鉄格子つきである。

まあ、それはさておき、

「おー、兄貴。何、助けてくれんの？」

「あー、それはないから安心しろ。」

ぐはあっ！

「じゃ、じゃあ何しに来たのさ？」

「決まってんだろ、茶化しに。」

へぶうっ！

「それと、親父から伝言な。『お前、晩飯抜き』だってさ。」

あべしいっ！

く、くそう、この性悪兄に一矢報いるには……

ぼく、ぼく、ぼく、ちーん！

「あー、平気。兄貴の部屋の菓子見繕って喰うから。」

「なっ！て、てめ、なぜそれをつ！？」

ふふふ、我が兄貴（超甘党）の部屋に菓子の買い置きが山のようにあることなんぞ、両親はともかく俺やメイドたちにとっては公然の秘密というものなのですよ？

「つく、わ、我が弟ながら、やるな……！」

「ってかバレてないと思ってた兄貴の思考……よりも嗅覚か、心配だね俺は。」

だって、あの部屋、匂いが甘つたるいんだもん。

「やかましわ！……ったく、何でこの手の目端と剣の腕だけは利くかね？」

はい、アンタがそれ以外パーフェクトな超人だからです。

そうなのだ。実はこの兄貴、荒事以外は怪物級の超優等生なのだ。何しろあの名門ラウス神学校を首席で卒業し、我らが連盟国枢軸議会の議員たる親父の秘書としてすでに各界のセレブたちに名と顔を売りまくっているうえ、ケンカはからきしのくせにそれ以外の運動は万能、しかも水準はるか上のイケメンと来たもんだ！

うん、実の兄じゃなかったら、石のひとつも投げたくなるよね。

とまあそれはさておき、仮にも名家の次男坊と呼ばれてきた俺ですよ？何かとりえのひとつもないと悲しいじゃない？ってことで、剣だけは本気で鍛えましたともさ。そういう学校にも通ったし。

いい剣士の条件って何だと思う？答えは目が利くこと。相手の力量を読むことに始まって、相手の剣筋を読むこと、自身の剣筋の正確さ、どれもこれも目が最初に働いてこそなんだよね。もちろん、生物学的なものだけじゃなくってさ。

ってわけで、この2つにかけちゃあちよいと自身がある。

「しよーがない、後でなんか持って来てやるよ。ただし、部屋の菓子の子のことは……。」

「オツケ、いやー、いいあにきをもってしあわせだなー。（棒読み）

」
「言ってる。」

そういつて兄貴は引っ込んだ。

よっしゃ、晩メシ確保！て自重しろ俺。閉じ込められてる状況に変化なし！

「しやーない、せつかくの倉庫だし……お宝探索開始じゃ〜〜！」

しばらくお待ちください

「うーむ、めぼしいのはこれだけか……。ち、シケてやがる。」

まあ俺の不謹慎発言はともかく、本当にこの倉庫はガラクタ置き場といった体だった。親父もそれなりの名士のはずなのだが、おいている場所が別なのかたいした物はなかった。

そう、ひとつだけを除いて。

「宝箱……。だよな。なんつーベタな……。」

宝箱。それ以外に表現のしようがあるうか。

朱く塗った木の板で組んだ蓋つきの箱に、鋼鉄製の金具で補強がかけられている。鋸打ちまでされたそれは、明らかに「宝箱」だ。

鍵は……。ついてない。

「無用心だな……。よつと。」

さて、中身はと……。自重？なにそれおいしいの？

「……。剣……？」

2. すげー剣ゲツト!・・・?

side 反省してない男

「・・・剣・・・? いや、刀か?」

うん、刀。

しかも結構禍々しい感じの拵えがついてるやつ。鞘の形からも、サーベル系の曲刀だつてことが判る。

俺は当然その剣を抜いた。そりゃね、俺も剣士な訳ですよ。目の前に剣がポンとあつて、見定めたくなるのつて当然だと思っわけですよ。

でも・・・わからん。

「真つ黒・・・つやも光沢もなし、黒刀、つて奴か。珍しいな。」

黒刀つていうものは、一般の刀より目利きがそもそも難しい。まず金属が何なのか、次にその金属の特性、そしてその錬性、そして切れ味に美術的価値と、見極める項目が多い。

だつてのに、流通量自体がそもそも皆無。世界中のどこに行つても黒刀なんてものは売つてないのだ。「教会」の指定で取引が禁じられてるから、つていうんだがその理由、俺知らないんだよねえ。

まあそんなわけで、黒刀つてのは目にする機会がない。俺自身、図鑑や上流階級が趣味で開いてる「秘宝館」つていう博物館(親父が招かれて連れてかれた)くらいでしか見たことない。こういったものは許可もらつてるらしいけど、詳しい話は知らん。兄貴と違って俺力ミサマ興味ないし。

まあ、見てもわかんない品だっことは理解いただけだと思う。

「てっ！はっ！てりゃ！」

わかんないんだから、とりあえず振ってみる。うん、いい刀だ。

いい刀の定義って人によると思うけど、俺はなんといつても扱いやすさと剛性だと思う。盾の無い片手剣の流派を修めた俺としては、振り軽いことと受けても折れないことが求められる。切れ味は・・・その次くらいかね。

そしてこれは、俺が触れたことのある中でも最高の刀だった。重心が絶妙なのと、残心時の手応えで剛性も伝わってくる。そして風切り音から察するに、切れ味も相当のものだ。

「・・・いいな、これ」

やばい。

テンション上がる。

「しびれやーーーー！！！！！！」

何、今の？

兄貴の声だった。

悲鳴・・・だったよな。

「つち、何があつた!？」

あの兄貴は、大概冷静だ。俺がおちよくつてもうるたえる程度で、決して醜態は見せない。兄貴の叫び声なんか、産まれてこのかた聞いたことが無かつた。

それだけで、非常事態が見て取れる。

「くそ、何とかここから出ねえと……。」

出たところで何が出来るとも思うだろうが、兄貴はケン力はかきし、親父もいい歳だ。万が一荒事のたぐいなら、そう長く戦えるわけが無い。お袋は……言うまでも無い。

「……こんのやるおあ!!!!」

俺は扉を全力でぶん殴つた。頑丈な扉である。殴つたところでどうしようもないのは目に見えてるが、何もしないわけにはいかなかった。

そして結果は、真つ二つ。

真つ二つ?なんで?

俺は恐る恐る右手を見た。

「……どーいう切れ味してんだ、この刀。」

うん、刀、握りっぱなしだったよ。

ってか非常識な刀だね。握つたまま殴つただけで、俺別に振つ

でもないよ？ちょっとしたブレで扉に当たった刀身が、木製とはいえ倉庫の扉クラスの頑丈な戸板真っ二つだよ？

「……ってそれどこじゃねえ、兄貴！」

俺はこの刀の鞘を急いで腰に差し、倉庫を飛び出した。

3・ぬるぬる

side マテウス

「何だよ・・・これ・・・。」

眼前の光景は、今が非常時であることを示すには十分なものだった。

「・・・気持ちわりい。」

俺の発言、不謹慎とかは言わない方向で。だってとりあえず抱くのはやっぱり、それだと思うんだ。

床中にぶちまけられたぬるぬるがぶよぶよと蠢いて形を成している光景は、絵的に受け付けられないっていうか・・・ねえ？

「・・・スライム・・・だよなあ、これ・・・。」

幸いにも剣術学校に通っていた俺は、そこらの一般人よりはモンスター知識がある。けど、こんなのは別に知識なんて要らないと思う。ぶよぶよとした液体モンスターなんて、スライム以外の何者でもない。

だが、このスライムって生き物は意外と物騒なのだ。スライムは変異種でもない限り大体強酸性。人間はもちろん、大体の武器や防具も侵蝕してしまう。下手に傷つけても何度でも再生するし、性質の悪さならそこらの凶悪モンスターにも負けない。

「こ、この刀、溶けねえよなあ・・・？」

うん、この心配、当然だよな？

スライムの対処法は大きく分けて3つ。液体部分を無力化するか、術法で存在そのものにダメージを与えるか、核を物理的に壊すかだ。うち術法は論外。術法が使える奴ならスライムの生命力？というか精神力？というか、とにかくそんなものを削り取ることで活動不能に出来る。のだが俺、そんな心得力ケラもないんだよな。

液体部分を無力化、つてのは例えば火とかで蒸発させたり、アルカリ持ってきて中和したりする方法。これは術法じゃなくても構わない。液体部分が使えないスライムはモンスターとして無力、つてことなんだけど、これも除外。火なんか屋内で使えないし、アルカリなんて俺の頭じゃ思いつかない。

となると残るは破壊なんだけど、剣ことうが溶けるようだと困る。戦う手段としてもそうなんだけど、これ、宝箱に入ってたつてことは、きつと高い物だつてことだと思っ。

つんつん

恐る恐る突つついてみる。結果は・・・大丈夫っぽい。この刀、何で出来てるんだろね？

まあそれはさておき、武器が大丈夫つてのはありがたい。このスライムを無視して兄貴たちの元へ向かうのは良策とは思えない。挟み撃ちの危険性もあるし、何より通してくれそうに無い。

ひよつとしてつついたの、痛かった？

だって、このスライムたちの殺気、明らかに俺に向いてるよね？そもそもスライムつてそんなに知能高くない。目的があつたとしても怒つたらそつち優先になるのは動物といっしょだ。

「冗談じゃねえぞ・・・！」

一斉に向かってきそうなスライム達を前に、俺は刀の握りを改めた。

side マテウス out

side ????

この町に来たのは、初めてではないがそう多くもない。だが、この町は実にいい空気を持っているので好きだった。人々の活気ももちろんなのだが、なんといつても空気の清浄さが他所とはまるで違う。

当然といえば当然だ。この町は広大な森林地帯の中にぽっかりと開くように存在している。町と呼べる規模なのは街道の整備が整っている影響だろう。「氷の港」と呼ばれる交易の拠点ハイネル港と「教会」のお膝元「宗教都市」セノワストの中間地点という立地は、人が集まるには十分すぎる理由だ。

「深緑の町」リネル。ここが私の今回の任務先だ。

「きゃーーーーっ!」

悲鳴!

私は駆け出した。任務とは多少違うが、悲鳴を見過ごせるほど無関心ではない。それに……

「せあっ!」

腰の剣を抜き、女性に襲い掛かっているスライムの核を斬りつけ

る。スライムはその体を保てずに崩れ、地面に染み込むと跡形もなくなった。

「お怪我はありませんか、お嬢さん？」

「は、はい、あの・・・ありがとうございます・・・。」
「気にすることはないよ。市民を守るのは騎士の務めだ。」

そう言いながら私は、近くにいた青年を呼び止める。

「君、済まないが彼女を安全な所に。私は行かなければならない所があるからね。」

「え、ええ、わかりました・・・。」

青年の言葉がしどろもどろになっているのは、騎士と話すので恐れているのかもしれない。親しみの持てる騎士、例えば部下のヨハンならばこうはならないだろう、要修練だな。

それに先ほどの女性もやっと恐怖と緊張が解けたのか、先ほどより血色がいい。一気に緊張が解けたのだろう、林檎のように真っ赤になっている。動揺させてしまったか・・・修行が足りないな。

「しかし街中でスライムとは異常だな、リードルス伯はご無事だろうか・・・。」

伯の屋敷にはアレがある。モンスターの本能から鑑みるに屋敷はきつと修羅場だろう。

私は腰の鞘に剣をしっかりと収め、屋敷へ向かう歩を速めた。

4・決戦！俺の家

side 普段は冷静沈着な兄貴

「父さん！母さん！」

久しぶりの醜態をさらしてしまった俺だが、恥をかいた甲斐あつてか両親とは合流できた。

「スタウト！無事であつたか！」

「あらあら、よかつたわあ。」

・・・なんか、拍子抜けな気がするのは気のせいですか、母さん？
というか、愛剣たる水晶剣「ミラージュ」を手に奮戦していたであろう父よりも、アルカリ洗剤塗ったフライパンでスライムを相手にしてる母が気になって仕方がない。

まあ、いろいろ規格外な人だし、デタラメ気にしたら負けなんだろうな、
きつと・・・。

「ねえスタウトさん、マテウスさん見てないかしら？あの子さつきから探してるのだけれどどこにもいないのよお。」

「あー、あいつなら倉庫で反省してる？けど・・・って、危ないじゃないか！」

忘れていたけど、考えてみれば危ない。何しろ非常事態なのだ。
引つ張り出してきて一緒にいたほうがいいに決まっている。反省は・・・また後日ってことで。

「心配はいらん。あそこは特別な倉庫で、出られんが代わりに入れん。窓から入ってくる程度のスライムなら、あいつの腕前には問題にもならんだろう。」

「腕前って、あそこ剣とか置いてあるの？」

「無くてもあそこには処分する予定のガラクタと、あとは術法で強化封印した箱が置いてある。使い捨ての武器程度でもあいつなら何とかする。」

余談だけど、ちよっぴりマテウスを羨ましいと思った。俺は父さんから期待されているほうだとは思う。いつだったかマテウスは「俺は別段期待されてるわけじゃないしさ」なんて自嘲わらってたけど、その代わりあいつは、多分腕っ節だけだろうけど、父さんに信頼されてる。あいつは気付いてないけど、俺にはそんなものかけられたこと無い。悔しいから教えてやらないけどな。

まあそんなことより、気になった物がある。

「・・・はこ？」

「『教会』からの預かり物だ。下手な結界より頑丈な特注品だから酸などでは溶けん。『教会』の道士様が3日かけて法力を煉り込んだ一品とのことだ、開けられなくても鈍器くらいにはなるだろう。」

へー、そんなのうちにあったんだ、とも言いたくなるけれど、うちの事情を考えればそんなに不思議なことでもない。「教会」の学校に通ってた俺の縁もあるし、宗教都市セノフストと氷の港ハイネルの中間地点にある町リネルの顔役である父自身がそもそも教会とつながりが深い。

が、それはそれ、これはこれ。

そんなものがあることは、別の意味で問題だろう。

「・・・スライムって、法力に寄ってく習性あったよね。もしかしてこの襲撃って・・・。」

「・・・あ。」

こんなうっかりおやじが連盟国の中枢に居るんだから、大丈夫かねこの国？

とはいっても今は父さんに頼るしかない。父さんはこれでも優秀な武人だし、俺もてんで駄目とはいえ戦わなきゃ溶けてスライムのパーツになるだけだ。母さんも守らなきゃ、今後二度とこの二人の長男なんて名乗れなくなる。

俺は近くにあつた筈の柄を握り締め、考えるのを止めた。

マテウス、無事でいろよ。

side スタウト out

side 親の信頼に気付かないドラ息子

「・・・へつくし！」

誰だ、俺の噂してんの？え、風邪？・・・ひかない自信ある！って胸張ることでもないけどさ。

しっかし、さすがにしんどくなってきた。スライムって対処さえ知ってれば別段強いモンスターじゃないんだけど、さすがにこう多いと・・・疲れる。

加えて、うちの屋敷って構造が無駄に複雑なんだよね。玄関ロビーから詰め所前の廊下に入ってパーティ用のフロア、奥の使用人エリア、階段上つて来客用寝室エリア、そこから奥の扉開けて食堂、から階段下りて浴室、戻ってキッチン、の脇を抜けてプライベート

リビング、から各自の寝室および書斎なんて具合で、腹立つくらい構造がめんどくさい。旧貴族の家で防犯を考えた伝統ある屋敷っていつても、もうちょい簡単でいいと思う。だって、部屋に着くまでに疲れるんだもん。

ちなみに、俺が閉じ込められてたのは別棟の倉庫ってか物置だわな。つまり屋外。

「くそつたれ、なんでこんなにいるんだ、よっ！」

また一匹仕留める。もう30は斬ったと思う。何だっってこんなに大量にいるんだ？つてか、ほとんどが俺のほうに向かってきてるのは、さつきつついたのもはや関係ないんじゃないか？

「どいつもこいつもっ、俺まっしぐらっつて、何の恨みだっつての！」

まとめて三匹払う。そういえばこの信じられない名刀、溶けるどころか全く切れ味が落ちない。これはこれで頼もしいんだが、そろそろ終わってくれないと俺のほうもたない。

そうこうしてるうちに、親父の書斎の前にたどり着く。ここは建物の構造がしっかりしてるらしいから、何かあったらここに逃げ込むように家族で打ち合わせてる。まあ、旅行で迷子になったときの待ち合わせポイントを決めておくようなもんだ。

の、だが。

「……あのさ、そどこいてくんねえかな……。」

親父の書斎の前には、で〜んとスライムが居座っている。しかも、ごっついでかいの。さっするに、親玉。さすがに最後がこれっつての

は、ちょっと精神的にキツイ。

「無理ってんなら、力づくでどいてもらうぜえ……。」

フラストレーションたまりまくりの俺は、目の前の巨大スライムに当たり散らす事に決めた。決めたつたら決めた。

「兄貴！……親父、お袋まで！無事かつ！」

巨大スライムを片付けて扉をぶち破る。ぶち破ったのは鍵とかかかってるかなあと思っただけど、簡単に吹き飛んだところを見るとかけてなかったらしい。やりすぎたかなとも思う。うん、反省。

「マテウス！生きてたか！」

「あらあら、無事でよかつたわあ。」

「無事か！しかしお前、どうやって出たのだ？」

三者三様だが、とりあえず応答は返って来た。どうやら無事らしい。

「……よかつたあ……。」

情けない話だが、家族の無事を知って腰が抜けた。突入してくるときに使用人たちは外に逃がしたから、人的被害はゼロ。うれしい限りだ。

「何だマテウス、でんち切れたか？」

「やかましい！どっかの誰かさんの悲鳴のおかげで大慌てだったん

だよー！」

「うぐぐ、口の減らないやつめ……。」

ニヤニヤしてからかいて来る一番の役立たず（多分）に、反撃の意味もこめて皮肉を返しておく。黙り込んだアホは放つといて、親父のほうに向き直る。

「……で、親父？ひとつ聞きたいんだけど……。」
「うむ。」

今この部屋には、俺含めて5人いる。俺、親父、お袋、兄貴、そしてもう一人。銀髪に銀の鎧、剣の拵えも白っていう何か純白なイメージは、どこと無く俗世を離れた印象を与える。そしてその容貌は、女子百万年の憧れにして、おおよその男の不倶戴天の敵。

「そこのイケメン、誰？」

えらいイケメンが親父達の後方に、なんとも所在なさげに立っていた。

5 ・親父もがんばってました（前書き）

今更のお願いですが、感想・ご指摘などいただければ幸いです。
素人の習作ですので、より多くの推敲を交えてよい作品にしていきたいと思っています。

では、本編をどうぞ。

5・親父もがんばってました

side うっかりな親父、の回想

「むう、数の不利は否めんか・・・。」

自慢ではないが私は武人としてはそこその所にあると自負している。一応ではあるが然る剣術流派の免許を皆伝した程度の腕前と思っていただけに通じるだろう。旧国家時代に伯爵位に就いていたリードルスの当主として、それくらいは教養のひとつだ。

しかし、一人で多数を相手にするというのは勝手が違いすぎる。剣だけならば私よりもはるかに使える次男坊を倉庫に放り込んだ手前、あれに頼ることは今更出来ん。長男は武術だけは何の因果かさっぱり、さらには妻を守らなくてはならないの言うまでもあるまい。まあ、思いのほか善戦出来てしまっている妻には驚いたが・・・。

「父さん拙いよ、このままじゃやられ・・・。」
「言つな。どうにかできると信じて動く者だけがどうにかなる。散々言い聞かせてきたはずだぞ。」

これは私の座右の銘だ。家訓と言い換えてもよい。尤も私が定めた物になるが。

原典では「天は自ら助くるものを助く」というが、息子達が幼い頃に噛み砕いて教えるために随分と砕けた言い回しになってしまった。しかし、息子達はこの言葉の方を未だに覚えていてくれるらしい。親馬鹿だが、今更改める気もない。いわば、息子達との絆なのだ。

とはいえここまで不利な状況というのは心が先に悲鳴をあげるものの、息子の悲哀はわからなくてもない。何しろ私だけでももう十五は突き倒したというのに眼前に広がるのはまるでスライム^{スライム}の海。最低でも今ここにいる分すべてを倒さなければならぬ。そして妻のかけてきた次の一言がさらに苦境に拍車をかける。

「ねえ、あなた？」

「・・・何だ？」

「洗剤、切れちゃったみたい。明日からどうしましょうねえ？」

妻よ、明日より今の心配をしてくれ。頼むから。

しかし、それはそれで拙い。何だかんだで妻も戦えていたのは洗剤を塗ったフライパンという武器の相性によるものだ。酸を無力化できるアルカリとして洗剤を即座に思いついた妻はさすが家庭人というほかはない。メイドもいるというのに、厨房だけは未だこの妻の領域^{テリトリー}なのだ。

閑話休題。

その洗剤がないということは、フライパンひとつしか手元に無いという事を意味する。そしてそんなものはすぐに意味がなくなる。溶かされてお終いだ。

私は、家長として一つの決断をせねばなるまい。

「セルシア、スタウト、私を置いて2歩下がれ。」

「??？」

「!!!」

スタウトは察したか。妻は・・・察せぬ方が幸せかも知れんな。守りすら捨て、道の一本でも開ければと突撃を試みる。乱れ撃ちでしかない剣閃でも、うまくすればいくつかの核まで届くかも知れ

ん。家族の逃げ道さえ開けばよし、開けなんだとしても守るべきものより後に倒れることなど、私自身の矜持が許さない。

そう、捨て身の覚悟。

「目に物見せてくれる・・・これがアドナレス・リードルスの生き様よー!!」

覚悟とともに、大見得を切り飛び出・・・そうとした。そう、しようとしたのだ。

だがそれは、イレギュラーによって阻まれることになった。

「伯、ご無事か！」

窓から飛び込んできたのは、フルアーマー全身鎧の剣士・・・騎士だった。

「・・・おお、そなたは・・・。」

「緊急ゆえ、抜刀いたします。御免！」

果てしなく白い閃光とともに、轟声はその場を支配した。眼前のスライムたちが見る見るうちにその数を減らしていく。まさに奇跡。その閃光の生む軌跡も、急速に収束していくこの戦場も。

そうしてもものの数分で、スライムの影はこの部屋から消えた。

命を捨てずにすんだことに私は安堵した。馬鹿な真似をした父の背中に刺さる妻と息子の痛い視線を浴びながら。

6・せわしない「あいさつ」

side ちよつと置いてかれ気味なイケメン

「……という具合に助けに来た騎士、つてことで理解してもらえるかな？」

伯のご子息という青年に向かって簡単に名乗る。二人いる子息のうち、後から飛び込んできた方が次男だという。家族の無事を知り安堵で腰を抜かしたその心根は、傍目に見ている私にとつても非常に好意の持てる青年だと思える。尤も戦場に跳び込むような真似はいただけないが……。

「……分かった。それはいいんだけどさ、何で騎士が助けに来れるんだ？^{セノワスト}宗教都市つて、あんまし行ったことないけど歩いたら二日はかかるぜ？」

「こら、失礼だろう！騎士様に何と言う口の聞き方をしとるか！」「伯、構いませんよ。自分は若輩の身です、歳も近そうだ。私は19だが、君は？」

「……17。確かに騎士にしては若いよな。」

17か、彼の言うとおり自分も若い方だが彼も若いな。

とはいえ、彼の所作振舞はたいしたものだ。とても17の若者とは思えないほど隙がない。そういえば彼は腰に剣……いや刀を差している。おそらくだが剣の心得があるのかもしれないな。

しかし……あの刀、どうも見覚えがある気がするのだが……何だったかな？

「……騎士さん？」

「え、ああ、すまない。少し考え事を、ね。」

「ならいいけど・・・結局答え聞いてないよね？何で来れたん？」

「ああ、任務があつてね。・・・つとそうだった！」

忘れてた！任務で来てたんだつた！

いかな、如何にここが居心地良いといつても任務を忘れるようでは・・・。むう、一罰必戒、帰ったら素振り追加で100はこなさねば・・・。

つと、また思考がそれた。よし、まずは済ませてから考えよう、うん。

「伯、本来の自分の任務なのですが、伯に預けた宝具の視察というものです。保管場所まで案内願えますか？」

side 騎士 out

side 礼儀知らず

「・・・行つちまいやんの・・・。」

「仕方ないだろ、本来は視察任務だけのはずなのに助けてくれたんだ。それに本来の任務を済ませたほうが騎士様も落ち着けるだろ？」

「そうねえ、騎士様も今日帰路に就くのは忙しないわねえ。今日は泊まっていかれるでしょうし、そのときにお話したらいいわよね？」

兄と母の言葉にそれもそうだ、と頷いておく。実際聞いてみたいことはたくさんあるしな。

剣くらいしかとりえない俺には、この世界の就職事情はひつじよーに厳しい。何せつぶしが利かないのだ。剣が出来てどんな仕事

があるって、騎士や軍属を除けば冒険者や傭兵、私設SPといった「いかにも真つ当じゃありません」業界が主流だ。実際、俺の同期生や先輩達はほとんど各国の国軍に所属している。俺は親父が政治家なもんだから軍属は最初から諦めざるを得なかった。だもんで騎士になるというのは、俺としても1つの夢だった。まあ、「教会」所属にしては信心薄いの問題だろうけど・・・。

なんて考えていたら結構百面相してたらしく、兄貴が話しかけてきた。

「あー、考え事か？」

「んー、まあ、ね。ほら、一応俺も騎士になるのちよつとした夢な訳だし？」

「じゃあ益々いろいろ聞いたらいいさ。ひよつとしたら口利きしてもらえる・・・ことはないにしても、聞いといて損は無い事だと思うぞ？」

「だな。」

「じゃあ話変えるけど、その剣・・・いや刀か、どうしたんだ？」

「そうよお、そんな高そうな剣、買えるようなお小遣いあげた覚え無いわよお？」

「ああ、これ？これは

」

「大変じゃー！ー！」

親父が血相変えて飛び込んできた。血相を変える、で辞書引いたらこんな挿絵が載ってるんじゃないか、つてな具合に絵に描いた血相の変え方だ。まあ、辞書なんて引いたことないけど。

「親父、どつたの？」

「教会から預かっておった宝具が無くなっておるんじゃ！法力で封印された箱も御丁寧に開いて・・・げほげほつ。」

「父さん、無理しないで。ほら落ち着いて深呼吸、すー、はー。」
「すー、はー、って何をさせおるかぁー！年寄り扱いするでない。そ、そうじゃ、マテウスよ、お前を閉じ込めていた倉庫なのだが、何か見てはおらんか？」

うーむ、親父ナイスノリツツコミ・・・はいとしても、宝具・・・宝具ね・・・法力で封印された箱ねえ、うーん、どっかで聞いたような・・・なんだっけ・・・むう・・・ぐう。

「寝るなバカモノ！」

「お、親父タンマ！ジヨーク、ジヨーク！」

「なお悪いわ！」

「ごちん。」

痛い頭はさておいて先ほどの箱だが、非常に残念なことに心当たりがある。うん、あれだよねえ、どう考えても・・・。何かやな予感したんだよね、取引禁制品だし、部屋の中に場違いな箱だったし、でも、まあ、生き延びられただし、きつと悪いことにはなるまい、うん。

「あー、その宝具って、これ？」

俺は腰に差した鞘ごと刀を取り、親父の前に差し出した。

「な、な、な・・・。」

うん、見ものだったね。親父が泡吹いて倒れる姿。

7・旅立ちと彼の名

side 未だ名前の出てこない騎士

「うん、大体は分かった。」

私は失神してしまった伯を協力してソファまで運び、ダイニングをお借りして御子息に話を聞くことにした。ご家族も心配なのかダイニングから離れようとしなかった。

彼の話をもとめると、宝具の刀は宝箱（封印の箱のことだろう）に入っていて、箱は簡単に開いた。これはいい。箱を調べたけど、術式が劣化していて法力が散ってしまった。魔除の加護も開けたときに消えてしまったようで、これでは鍵としての役割の方は期待できない。

そして中に入っていた良さそうな刀を試し振りしていたところ悲鳴が聞こえ、その刀で脱出した後スライムを30ほど切り伏せた拳句巨大スライムを倒して我々のいた書斎に飛び込んできたとのこと。

だが、二つほど、気になることがある。

「ええと、質問してもいいかい？」

「・・・ああ。」

半ば尋問のようになってしまったからか彼の表情は硬い。が、この際気にはいられない。下手をすれば大事なのだ。

「じゃあ一つ目。君は巨大スライムを倒してきたと言っただけ、その実力はいったいどういうことなんだ？普通のスライムはともかく、一般人に相手できるような代物じゃあないはずだよ？」

彼の所作振舞から腕が立つのは見て取れるが、その腕前は高すぎるといつても過言ではない。何しろ撃破を確認したスライムの核からして、我らが騎士団ならともかく国の正規軍ならば10人単位の討伐隊が組まれるようなサイズだ。スライムの実力はサイズに比例するといわれており、単独で相手するのは私とて出来れば避けたい。答えたのは、彼の兄君だった。

「こいつはクレイマン衛士学校の卒業なんです。剣術だけならすでにうちの親父以上に強いんですよ。」

なるほど、あの名門校の……。クレイマン衛士学校は深緑シネルの町に本校を置く武人の名門校だ。武芸と兵法に重きを置き、卒業すれば軍人としての栄達が約束されるというまさに名門だ。納得。

「成程、心得があるだろうとは思ったけど、そういうことか。」
「……で？二つ目は？」

彼は面映そうな表情を浮かべながら話を流そうとしているようだ。察するに自慢になりそうな話題で語りたくなかったのか。初手柄をあげながらも自慢にならない様抑えながら報告をする新任の騎士と同じ顔をしている。

閑話休題。

もうひとつの疑問の方が重要だ、何しろ宝具の存在そのものに関わる。

「うん、その刀、そもそも鞘から抜けないはずなんだが……。君はそんな刀でどうやって戦ったんだ？」

side 騎士 out

side 名門出にとっても見えない男

・・・は？

「ええつと、鞘のまんまぶん殴る、とか？」

兄、黙れ。そんな野蛮な戦いしてない。

「いや、鞘は法力のこもった本体はともかく、装飾が後付で脆いんだ。そんなことをしてたらもう少しポロポロになっている。」

「いや、これふつーに抜けたけど。黒刀なんてレアもんだつたからスライムでも溶けないし、切れ味も振りやすさも逸品だったんで戦いやすかったぜ・・・て、どしたん？」

全員絶句。まあ、意味合いがそれぞれ違いそうだが。

兄貴はまず、すっげえジト目で見てる。明らかに疑ってるだろアンタ。お袋はお袋で嘘には敏感な人だから、事実を言ってるのだと確信してるらしく納得している。いや、話そのものに矛盾があるってことには・・・気付いてないんだろうな、お袋だし。

んで、騎士の方は・・・なんか考え込んでいる。もしかして俺、やっちゃったっばい？

「あー、騎士さん？」

「ん、済まない、また考え込んでしまったな。君、今その刀抜けるかい？」

「なあ……。」

「何故抜けたのか、かい？それは私もわからない。」

「あ、そ。」

残念。

「だが、宗教都市セノウストの本部ならわかるかもしれないな。」

「調べられるのか？」

「図書館があると言ったろう？生憎な事に私は入館許可証を持っている。図書館になら資料があるかもしれないし……君も来るかい？」

へ？今何だった？

「そうだな、それがいいだろう、行ってきなさい。」

「親父？目え覚めたのか？」

「うむ。第一騎士殿にも証人が必要だろう。お前なら騎士殿の護衛代わりにもなる。騎士を目指しているなら『教会』本部を見ておくのも勉強のうちだ。」

う、反論させない気がこの親父。寝起きのくせに周到な。

でもまあ、一理あるってか真理だよねえ。しょうがない、行って来るか。

「……わかった、行って来るよ。けど、その前にひとつ話がある。」

「？」

つまり、これから二日……往復だから四日か、は旅に出ること

になるわけで。

その騎士は、短いながらも旅の連れになるわけで。

「俺はマテウス。騎士さん、あんた、名前聞いてないよな？」

騎士さん、なんぞと呼び続けるのは結構不便なわけで。

「……はははっ、そうわれれば忘れてたね。」

……ははは、で済むうっかりじゃないわけで。

「私は『教会』本部・教皇猊下直属騎士団「青天」隊副長、「アル
トス・ゼシカ・インダクト」だ。通名は「ゼシカ」で通している。
よろしく。」

そう言うと騎士　ゼシカは右手を差し出してきた。

ちくしょうイケメンめ絵になるじゃないか。う、羨ましくなんて
ないんだからねっ！

序章 旅立ち 了

7・旅立ちと彼の名（後書き）

というわけで序章終了です。

本作の形式ですが、章末に主要人物の紹介をはさんで次章に進むという形で行こうと思います。なるべくそれ以降のネタばれは避けようと思います。

しかし1回の投稿長くした方がいいのかなあ、プロット分全部書くと100話ゆうに超えるんだが・・・。

序章 人物紹介

ここまでの人物および設定紹介

マテウス・リードルス

- ・主人公。深緑の町リネルの名家リードルス家の次男。
- ・家族との仲はいい。素直でない面が多々あるが家族の絆自体は強いと信じている。
- ・クレイマン衛士学校を規定どおりの16歳で卒業している。これはかなりの優等生の証であるが、それはほとんど剣と兵法が比重高い校風の賜物であり、学問の方はさっぱりでやる気もない。

スタウト・リードルス

- ・マテウスの兄。リードルス家の跡継ぎ。
- ・弟とは「如何におちよくられずに相手をおちよくるか」という会話を繰り返す仲。互いに冗談だとわかっているためある一点を除いて溝はない。
- ・ケンカ以外万能で水準以上のイケメン。完璧すぎて「たまに石投げたくなる」（マテウス談）。

アドナレス・リードルス

- ・マテウスたちの父。旧国家伯爵家リードルスの当主で連盟国議会上院議員。
- ・非常に厳格な父・・・になりたいと思っているが持病の「うつかり」のせいでかなりあわただしいお人。「厳格なだけよりも親しめるいい父」（スタウト談）。
- ・剣士としても水準以上の腕前を持つ。レイピアを用いる刺突剣が持ち味。

セルシア・リードルス

・リードルス家の奥様。メイドを雇っているのに厨房を譲らない根っからの家庭人。

・性格は天然おっとり系で、細かいことを気にしない。

・戦いは素人のはずなのにスライムと渡り合うなどいろいろと規格外なスーパー奥様。「デタラメ」（家族一同談）

アルトス・ゼシカ・インダクト

・「教会」本部付騎士団・教皇直属「青天」隊副長という肩書きを持つ騎士。

・すべての男の敵といわれるほどのイケメン。「白を基調にした武装が俗世離れしている」（マテウス談）

・周りからは名で呼ばれることはほぼなく、ミドルネームの「ゼシカ」が通称。

以下設定

連盟国

・マテウスたちの住む国。元々中規模の国の集まりだったが国際的発言力の向上のため完全に結合、旧国家の重鎮達による上院議会と選挙で選ばれる下院議会とで運営されている。

深緑の町「リネル」

・マテウスたちの住む町。大きな森林の中に通る街道の中間地点にあり、発展している割に空気が清浄。

・セノワストとハイネルの間という立地上宿場としての機能が強く、一般家庭でも客用の寝室を備えて宿を副業にしている。

宗教都市「セノワスト」

・「教会」の本部がある街。規模は相当でかい。リネルからは徒歩で2日ほど。

氷の港「ハイネル」

・連盟国の交易拠点。リネルからは徒歩で3日ほど。

「教会」

・世界のほぼ全域で信仰のある宗教。独自の騎士団を所有し、政治家などにもパイプがあるため発言力がかなり強い。

「教会」本部付騎士団・教皇直属「青天」隊

・ゼシカが所属する部隊。騎士を単独で任務に出すなど隊として運用されることが少ないがそれぞれが優秀な騎士で構成されている。

クレイマン衛士学校

・リネルに本校、各国に分校を持つ軍学校。名門中の名門で苛烈な授業で知られ卒業生は本物の精鋭として各地の軍に歓迎されるとい

う。
・校風として実践主義を標榜しており、机上の知識よりも剣術や兵法の能力が重要視される。

・マテウスはこの学校を規定どおりに卒業している（最低6年通学、16歳以上で卒業試験受験可、以降は留年扱いとなる）ため、相当な優等生ということになる。

ラウス神学校

・セノワストに所在する宗教系の学校。知識面で連盟国内随一の名門といわれているが有力者の子弟がコネで紛れ込むこともある所謂「看板の大きな」学校。

・実際に優秀な人物もそれなりに多い。実際教育機関としてはかなりハイレベルである。

序章 人物紹介（後書き）

この紹介の回で公開するのは、「現時点で明らかになっている事実」および「本編にそもそも関係のない裏設定」のみです。
もしも「記載してほしい内容」などありましたらご一報ください。

8 ハードモードな珍道中（前書き）

ほぼ全く告知していないマイナー作にもかかわらず、

今話投稿時点で450以上のPVと、130以上のユニークアクセスを頂きました。

読んでくれている人がいるというのはめっちゃくちゃ嬉しいですね！

では、第2章始まります。

8・ハードモードな珍道中

第2章 醜い泥沼

side 旅に出た次男坊

「・・・なあ。」

「・・・何だい？」

「・・・この道って、そんなに険しくないよな？」

「・・・そのはずだ。」

「・・・じゃあ、何で5日経っても着かねえんだろうな・・・？」

正直、うんざりだ。

あの日は結局ゼシカをうちに泊めて、翌日は俺の旅支度、そしてさらに翌日になって俺が寝坊し、その日の午後になってようやく出立と相成った。男の俺が1日も旅支度に使ったなんて俺自身も信じられないけど、理由は割と単純だったりする。剣を買いに武器屋に行っただからだ。

武器を買うのには、実は大して面倒な手続きなどはない。観賞用などの華美で値が張るものは保証などの書類を書く必要があったりして面倒なのだがこちとら求めるのは実戦用だ。保証なんて無意味だしそもそも付くはずがない。だが店の配置が悪かった。うん、深緑^{リネル}の町の端から端まで歩く羽目になるとはねえ。

閑話休題。

出立までにも時間は要ったが、出立さえしてしまえば2日もあれば着くはずだった。出立が午後だったことを考えても三日でいけるはずなのだ。だがさすがにあと僅かだとはいえ5日目の現在、俺とゼシカは背中合わせにへたり込んでいる。疲労困憊。

「盗賊が襲ってきたから・・・で納得しないかい？」

「バカ言え、モンスターもわんさかじゃねえか。この街道ってこんなに治安悪かったっけ？」

うん、家のスライム騒動なんかメじゃないね。

何しろ盗賊に襲われたと思ったら、その盗賊が倒すより速く減っていった、何事かと思ったら盗賊団の連中が後ろからモンスター（ゴブリン？だったと思う）に襲われてて、仕方ないから盗賊と共闘してモンスター倒したと思ったら、まだ諦めてなかったのか盗賊どもが襲い掛かってきて、そいつらとつちめて街道の監視所に届けるので1日、その翌日報復に来たモンスターの群れとたった二人で大立ち回りを演じて1日、脱走して追いかけてきた盗賊の連中に引導渡して1日、遅れ取り戻すためにほぼ丸1日走って、今日は今日で別のモンスターの群れに遭遇しているのだ。

あー、疲れた。

「モンスターは確かに異常だね、盗賊がいるのはいつものことだけど・・・。」

「いつものことって、おい。」

「ここは盗賊にとつて美味しい稼ぎ所なんだ。何しろ交易の動脈みたいな街道だからね。他所でやるよりはるかに獲物が多いんだ。」

「・・・徒歩の二人組なんて襲って、なんかいいことあるのか？」

「ローリスクだと思ったんだろうね。私の鎧だけでもそれなりの値にはなる。騎士とは言っても、大勢でかかれれば何とかかなると思った・・・。」

「へえへえ、そいつは御愁傷様なこと。拳句に振り返ちとは笑えねえな。」

「そういう君がデタラメなんだと思うけどなあ。振り返ちに出来る君の実力が一番謎だよ・・・。」

「それをアンタが言うか？」

「私はいんだ。若輩とて騎士団の副長なんて肩書きをもらえる程度の戦力ではあるつもりさ。」

そんなもんかねえ。ま、いいけどさ。

まあ、思わぬ長旅になっただけど、それでも得るものはあった。ここまでの会話でだいぶ想像はつくだろうけど、俺とゼシカは結構ウマが合うらしく、背中を預けて戦ってれば仲たがいというわけにもいかない。短期間とはいえ、頼りに出来る程度の信頼は互いにあると思う。

「真の友を得ることは世界を手に入れるより難しい」学校通ってた頃の心得の授業で習った言葉だけど、うん、実感するよな。

「ま、いいか。そんなことより、まだ着かないのか？」

「いや、もうじきのはずだ。先ほど目印の三本杉を超えたから、もう30分もかからないはず……。」

「お、あれか？」

「……マテウス、君は自分がした質問の答えを最後まで聞くようにしたほうがいいと思うよ。」

いや、だって、ねえ、答え見えてるし。

side マテウス out

side 説明の長い騎士

「ふう、やっと着いたか……。」

「相変わらずでかい街だな……。」

マテウスの言葉に、地元民たる私も領かざるを得ない。各国の首都とほぼ同規模の都市なだけに、街の全域まで知っているものは行政の従事者や運送業、後は私達「教会」関係者位なものだという。

「マテウスは何度か来たことがあると聞いていたね？」

「ん、ああ。学校の研修旅行とかでな。騎士になる奴も多い学校だから「教会」本部とその付属施設位しか見てねえけど。」

そういえば、「教会」本部は各地の学校が研修や修学旅行などの先に行っている有数の観光地でもあったな。私は地元民だけに他所だったが、何度か自由行動中の学生に案内を頼まれたこともある。その学生いわく、「迷ったら騎士に聞くのが確実」などと旅のしおりに書いてあるらしい。全域について知っている騎士は道案内に最適だし、認識票や装備ですぐ判り身元も保証されているから危険もない、とのことだ。なるほど理にかなっている。

そんなわけで、案内にかけてはちよつとしたものなのだ。

「それなら、今日はもう遅いけど明日は宗教都市セノフストを見て回ろう。折角あれだけの苦労をしてきたんだ、観光の一つや二つバチも当たらないだろう。」

「そりゃあ有難いけど・・・いいのか？任務の報告とかあるんだろ？」

「もちろんさ。実は報告書が全くまとまっていなくてね、かといってどんなに急いで書いても明日の午後にはなるし、「証人として招待した人物に休息を」って言い訳がほしい、ってわけさ。」

「あ、なるほどね。」

実はこれ、騎士団の通例になっている。任務を終えて帰ってきた騎士は、当たり前だが報告書を書かねばならない。帰り道のことまで報告に挙げねばならないため、任務地で直接書くわけにも行かな

いのだ。

ところがここで、「教会」という権威が邪魔になる。帰ったのならば直ちに報告せよ、なんぞと言い出すのだ。無闇に遅らせるのはすなわち神への不敬である、ということなのだが、それをまともにしたのでは報告書など仕上がらない。かといって報告書を出さなければまともな報告になどならない。資料を手元において、その上で説明を受ける。そうしなければ伝わらない報告というのは、特に戦闘について素人な上層部への報告においては、非常に多いのだ。

閑話休題。

そこで歴代の騎士たちが取ってきた作戦が「宗教都市セノフストに入ってから何らかの理由で足踏みをし、そこで報告書を書き上げてから本部に戻る」というものだ。任務の日程など不確定なのだから、という死角を利用した解決法で、任官したての騎士は最初の任務でこの方を先輩から教わる。

「それなら明日の朝イチで鍛冶屋か研ぎ屋に行きたいな。安物買ったつもりもないけど剣がボロボロだし。セルフメンテにも限界あるからな。」

「それなら任せてくれ、腕利きを紹介するよ。というか時間かかるだろうし、今からでも行っておいた方がいいだろう。」

実際彼の剣は私の騎士剣よりはるかにボロボロだ。剣自体の性能もあるだろうがそれ以上に戦闘におけるスタイルの違いが大きく出ているのだろう。私は小盾バックラーを持つ片手剣に、「教会」の秘術「天術」を絡めた騎士団の養成施設独自の「天術剣」を用いる。刀身への負担はたいしたことはない。

対して、彼の剣術は片手半剣とでも言おうか。握りを片手、両手と切り替えながら、さらに左右の手を持ち替える事も多い。当然盾はなく、刀身で受けて止めるか流す、あるいはかわすという防御スタイルをとっている。刀身への負担は計り知れない。

ともかく、5日のうち3日は戦っていたということで、数打ちでもないが名品ともいえない彼の剣はボロボロだ。研ぐどころか鍛えなおす必要さえあるかもしれない。いや、そもそも直るのか？

「まあ、最低でも明々後日^{しんめいごじつ}までは滞在する予定なんだ。のんびりやればいいさ。」

「明々後日？」

「まず今日は報告するの無理なんだろう？明日は俺の観光中に資料をまとめて、明後日は報告と資料探し。まさかその日の内に帰れ、なんて無茶は言わないだろ？」

私は正直嘆息した。

彼は頭が良い方ではないと伯から聞いていた。実際勉学の成績は酷いものだったという。本人も認めていて、「頭悪くても騎士になれるのか？」などと聞かれたりもした。ちなみに答えは半々。戦闘任務中心の部隊でならばまず採用されるであろう実力（というか私の下にほしい）の持ち主だが、面接官の頭が固ければ即不採用だ。

だが、今の日程をすばやく想起したのは間違いない。指を折りさえもしなかった。日程のようなものは即座に考えるには計算が要り、事前に考えていても思い出しながら数えなおす必要がある。実際騎士の研修の課程に日程表の作成などというものはある。苦労する者は、多い。

「ん、どしたん？」

「あ、ああ、いや、何でもないよ。」

未知数。

私は彼の人物像に、そう書き加えざるを得なかった。

9・暇潰しのおせっかい(前書き)

今回の話はゲーム構想時代にサブイベントとして考えていた幕間の
ような話になります。

ただし本編と全くの無関係というわけでもないものであしからず。

では、本編をどうぞ。

9・暇潰しのおせっかい

side 1日ヒマになった男

「観光つつつてもなあ、何見たらいいのかわかんねえよ。」

正直俺の心境はこの一言に尽きる。

昨日はあのあと鍛冶屋に行った。で、

「時間かかりそうだなあ、明後日まで預からせてくれる？」
などとあっさり鍛冶屋に言われてしまったもんで、正直あまりいい物じゃない代刀を腰に差している。まあ、客に預ける代刀なんてこんなもんだろ。

で、その後は宿に向かってボタンキュー。何しろ5日の間野宿ですらろくな睡眠はとってない。交代で見張りながらだからあまり長時間寝入ることが出来ないのだ。これって結構な負担だったもんで俺はもとより旅慣れているはずのゼシカでさえメシも食わずにベッドにダイブだ。

翌朝起きてからは、ゼシカは報告書の作成とかいって宿に一日カ
ンヅメらしい。俺は最後にチェックを手伝えばいいらしい(ってか
手伝いなんて俺がしても邪魔)ってことで宿を出てみたんだが、こ
こで問題が発生する。

どこに行ったらいいの、全くイメージが湧かないのだ。

そもそも俺は宗教建築とか興味ないし、宗教都市セノワストは他の大都市と
比べても娯楽の類が少ない。だって宗教都市だから。まあしかたな
いよな、うん。

食事は美味しいところもあるが、往々にして値段が高い。盗賊退治
の報奨金とかで財布の中身は多少暖かいけどそんな無駄遣いは俺の
趣味じゃないし、かといって同価格帯で比較すれば深緑リネルの街の方が
美味いってのは常識だ。「緑豊かな流通要衝のメシ」は、世界でも

トップクラスに美味いってお袋も言ってたし。
って訳で、行き先にあてがない。さてどうしたもんか。

「兄ちゃん、ガイド雇わない？」

ん？

「こつちこつち、後ろだよ！」

後ろ・・・何もいないな。

「下、下！」

下・・・！！！！！！

「うおわああ！びっくりしたあ！」

「ホントに気付いてなかったんだ・・・いいリアクションだったぜ、兄ちゃん！」

おいこら、サムズアップはやめなさいサムズアップは。

俺に声をかけてきたのは小さな男の子だった。うん、小さい。察するに、同年代平均と比べても小さい。そして細い。栄養状態が良くないんだろう。

まあ、その辺は触れぬが花だ。

「やかましい・・・んで、何か用か？」

「だから、ガイド雇わないか？」

「・・・いくらだ？」

「1日200ルランでいいぜ。」

・・・安っ！

ガイドのレートがいくらなのかは知らないが、日雇いの労働報酬は一日大体500ルラン位だっって聞いたことがある。ちなみに俺が履いてる靴が300ルラン、俺の小遣い一月分ちよいだ。ちなみにそんなに高級品じゃない。

・・・あやしい。

「で、その裏は？」

「べ、別に何も無いよ！」

・・・じーーーー。

「な、何も無いってば！」

・・・じーーーー。

「う、そ、そりゃあおいら達の都合で有料の名所案内とかは出来な
いけどさ・・・。」

・・・じーーーー。

「・・・分かったよ！話しますってば！」

「よろしい。」

うむ、やはりあったか。やはり子供、まだまだだねえ。

「で、どういう魂胆だったんだ？」

「平たく言つとさ、おいら達の聖歌練習に客を呼びたかつたんだよ。」

あれって一応無料ってことになってるけどさ、入場料代わりに有志で寄付を募ってるんだ。おいら達の孤児院の運営資金になるから少しでも集めたくって……。」

なるほど、こいつ、孤児だったのか。

「ならガイド料とか言わないで素直に客引きすればよかったじゃねえか。」

「そうなんだけどさ、寄付って全額孤児院に行っちゃうんだ。どうせ先生達がピン撥ねしておいら達のところにはほとんど来ないに決まってるんだ。」

知りたくもねえ世知辛さ、って奴か。

「……小遣い稼ぎか？」

「違うよ！どうしても買いたいものがあつたんだ！」

「何をさ？」

「……プレゼント。先生達とは別で、聖歌隊からボランティアに来てくれてるねーちゃんがいるんだ。今度来てくれるようになって5年の記念日でさ……。」

「……。」

「何とかして自力で稼ぎたかつたんだ。騙そうとしたのは誤るよ。」

けど……。」

さて、どうしたもんかねえ。

話の要点は4つ。まずこいつがやったのは詐欺の部類だったこと。法律の話は良くわからないけど、金を多く払わせようとしたってことになっちゃう。そしてその金がこいつに入るとなれば、きつと詐欺なんだろうと思う。

んで、こいつの動機がおおいに善意だったこと。まあこれが嘘だ

つたら大した役者だけど、どう見ても10歳超えてない子供にそこまで演技できるとも思えない。

それと、普通に入場して寄付をしてもこいつの望みはかなわないってこと。察するにその先生とやはら子供にも分かる程度には腐ってるんだろう。こいつの体を見ればまともな飯を食ってないのは分かる。「教会」なんて大組織の運営する孤児院にもかかわらず、だ。最後に、俺が真相を聞いてしまった以上、見逃してハイサヨナラって訳にもいかないって事。

「話は分かった。けどあれじゃ詐欺だ、そんな方法で稼いだ金でプレゼントされてもうれしくねーだろに。」

「……けど……。」

「それに、お前あんなのやつたら即捕まるぞ。「教会」の孤児院にいるって一発ではれるんだぜ？」

「あ……。」

「んで、捕まったなんてきいたらそのねーちゃん、きっと悲しむな。自分のために捕まったなんて、泣くしかねえだろよ。」

「……。」

「この辺はやっぱりはつきりさせとかねえとな。罪は罪だし。まあ未遂だけどさ。」

まあ、それはそれとして。

「まあ、プレゼントなんて何も高いものじゃなくたっていいんだ。」
「……え？」

ちょっとしたおせっかいだ。これくらい、してもいいよな。

「お前、名前は？」

「え、じ、「口口……。」

「何プレゼントしようと思ったんだ？」

「・・・ねーちゃん、歌が好きなんだっていうから、楽譜買おうかなって・・・。」

「よし、見に行こうぜ。」

「え・・・。」

「本屋・・・楽器屋か、どこよ？ガイドしてくれんだろ？」

「・・・おうー！」

「ふーん、^{デイトナ}議会議会都市で流行の歌の本か・・・。」

「うん、ねーちゃんちよくちよく立ち読みしてたんだ。5曲入りで200ルランなんだって。」

結局その楽譜とやらは楽器屋の書棚コーナーにあった。店主に聞いたところ、こういう楽譜とかは普通の本屋にはあんまりないって話だ。ちなみに店主は人の良さそうなじーさまだった。まあ、服の背中に「音魂」なんてでっかく書いてあるファンキーなじーさまだけど・・・。

それはさておき、俺は子供改めコロロの前にしゃがんだ。うん、目線がちょうどいい。

「いいか、よく聞け？」

「おうっ！」

「ここに100ルランある。これが今のガイド料だ。」

「・・・って足りないよ。」

「当たり前だろ？一件ガイドしただけだぜ？」

「・・・。」

「で、これで専用ノートと筆記用具を買っ。」

「？」

「200ルランで買えちまうわけだ。残りは？」

「えっと、80ルラン？」

「おう、簡単な引き算だよな。んで、さっき確認したところこの店では2割の値段で本を借りられるサービスがある。もちろん新品なんぞは貸してくれないけどな。」

「・・・どういこと？」

「まあ聞けって。んでもってこれ、5曲入りなんだろ？一日じゃとても無理だけど、2日がんばれば5曲は無理でも3曲くらいなら何とかなるだろ。」

「まさか、まさか・・・。」

「そ。あとは自分で書き写せ。」

「やっぱりかーーーーー！！！」

一応弁明しておくけどいくら俺がバカかっていっても、さすがに足し算引き算程度は何とかなる。2割の値段は40ルラン（店主に確認した）。2日で80ルランだ。さっきの文具とあわせて100ルラン。うん、計算どおり。

そんなこんなでしゃべってたら、店主も気になったのか顔を出してきた。

「そういう客は多いんじゃないよ。実際に楽譜を買っていくよりも借りて練習しようとか書き写そうとかの方が客が多いくらいじゃし・・・。」

「へー。」

古書収集が趣味の親父いわく、昔は本屋は本を売るよりも貸すほうがメインだったって話だ。びんぼーな音楽人たちはとりわけ需要が多いのかむしろ借りるのが主流だという。

「少年、事情は聞いたぞ。手伝うわけにはいかんが、書き方なんか

の指導はしっかりと見てやるから、しっかりと書き写すんじや!」

コロロの両肩をがっしりと掴んで語っている店主。いやあ、情熱的なじーさんだこと。

「・・・うん、おいら、やるよ!立派な楽譜書き上げて、ねーちゃんへのプレゼントにするんだ!」

「おー、がんばれがんばれ。」

「って兄ちゃんホントに思ってる?」

まあジョークはさておき、プレゼントなんてのは真心が大事だな。それが見てすぐに分かるプレゼントの方が、そのねーちゃんともやらも喜ぶだろうし。

これ以上いても邪魔だと思った俺は、早速机に向かっていているコロロには特に何もいわずに楽器屋を出た。ガイドのチップは払ったし、後は店主がうまくやってくれるだろ。

いい暇つぶしになった。昼メシ食うのも忘れてたし、宿に戻るとすっかな。

side マテウス out

↳ 2 days after ↳

side 音楽づめの2日間を過ごした少年

「ねーちゃん!これ、皆からのプレゼント!」

結局、おいらのノートには4曲分しか書けなかった。時間もそうだけど、紙が足りなかったんだ。まああれより紙の多いノートだと高くなっちゃうっていうし、しょうがないかな。

「これ、欲しかった新曲の楽譜……。」

「の写しなただけだな、ホントは本物あげられたらよかったんだけど……。」

「コロ、あんたこんなノートなんてどうしたのよ？」

「え、べ、べつに、金ためて買っただけ、だけど？」

う、いきなり疑うかねーちゃん。

「嘘おつしゃい！ためるような金があんたのどこにある！」

鋭い。

「おねーちゃ、ちがうよ？」

「え？」

俺をかばうようにねーちゃんの袖をくいくいと引っ張ったのは……
妹分のネカネだ。

「ころにいちゃ、おしごととしてたよ？ころにいちゃよりおっきなひと、あんないしてたよ？」

「バ、バカ、しーっ！」

それは内緒だっていっただろ！

……ちらり。

「……コロ、あんたそれ、本当？」

ねーちゃんはしっかりとこっちを見ている。

あー、もうだめだ。

「……うん、ガイドの仕事。そのお客さんにノートとかの世話してもらったんだ。」

実際はちよつと違ってあの兄ちゃんの善意に甘えちゃったわけだけど、兄ちゃんがそういう形に（体裁上）してくれたんだから、嘘は言っていない。

けど、ねーちゃんはそれを聞くなり後ろを向いて、ノートを抱きしめるようにしたまま黙っちゃった。

「……？ねーちゃん？」

「おねーちゃ、だいじょぶ？どこかいたいの？」

ねーちゃんは、泣いてた。

おいらには見えないけど、ネカネの反応を見ればそんなの分かる。

「……ありがとう。これ、一生大事にする……。」

プレゼント作戦、大成功だ。

でも、結局あの兄ちゃんの名前聞いてないや。それに楽譜を書くつてのも結構面白かったな。楽器屋のじーちゃんに頼んだら、また教えてくれっかな？

side □□□ out

この後20年を経て、□□□少年は音楽家として世界に名を知らしめることになるが、それはまた別の話

9 ・暇潰しのおせつかい（後書き）

この国の貨幣単位は「ルラン」です。

日本の貨幣価値に換算して1ルラン＝20円くらいと
思ってください。
い。

但し、物の価値はもちろん変動大有りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8687y/>

がらくたくえすと

2012年1月6日01時52分発行